

第三部 ——— 戦争犯罪者は相応の処罰をうけなければならない

世界のすべてから孤立するアメリカ

ドイツ・ファシストの憎むべき犯罪以後、アメリカ帝国主義によってベトナム、とくに南ベトナムで現におこなわれている犯罪ほど世界に、強烈な衝撃を与えたことは決してなかったといえよう。

東から西まで世界のすべてのところで、アメリカ本国においてさえ、人びとは抗議にわきかえっており、南ベトナム人民にたいするアメリカ帝国主義の犯罪に抗議し、告発するかつてない多様な形態の熱烈な運動に参加している。

社会主義諸国、アジア、アフリカ、ラテンアメリカの多くの民族国家の政府と人民、多くの国際、国内諸組織、多数の科学者、著名な知識人、名士、アメリカ人民をふくむ帝国主義国、資本主義国の人民——ひとことでいえば全世界の公正な人びとと全進歩勢力は断乎としてアメリカ侵略者を現代におけるもっとも残忍な嫌悪すべき戦争犯罪者として暴露し、非難している。アメリカ政府がいまほ

ど、世界の世論の前に孤立したことはいままでになかったことである。

有名なイギリスの哲学者、バートランド・ラッセル卿は、ノーベル平和賞受賞者、作家、哲学者、数学者など世界の著名な人びとに、南ベトナムで過去一二年以上にわたって毒ガス、毒薬、ナパーム弾、黄リン爆弾、無差別爆撃、拷問などによる大規模な大量殺人をおこなった責任者として、ジョンソン、マクナマラ、ディーン・ラスク、キャボット・ロツジ（南ベトナム駐在アメリカ大使）その他を欠席でさばく戦犯法廷を設けることをよびかけた。

アメリカの歴史のなかでも、ジョンソン政権ほど、そのベトナムにたいする犯罪的政策によって、アメリカ人民に強力に、断乎として反対されている政府はなかった。アメリカ人民は、かれらの名においてジョンソン政権がアメリカの名をけがし、南ベトナムにおけるけがれた犯罪をおかすことを拒否している。数十万人のアメリカ人が、アメリカ国内の主要都市でおこなわれたティーチ・インやデモンストレーションに「ジョンソンよ、きょうは何人の子どもや婦人を（ベトナムで）殺したか」「ベトナムでのアメリカの犯罪を終わらせよ」などのスローガンをかかかって参加した。

アメリカの新聞「マイノリティ・オブ・ワン」の編集長で、ファシストのビルケノー強制収容所からの生還者、M・S・アーノニー氏は一九六五年十月一五日付でアメリカ人民の真の叫びを発表した。ジョンソン政権がかれとかれの家族にたいしておこなった報復措置についてしるしたあと、アーノニー氏はつぎのようにならべている。「どのような圧迫で私にベトナム人民にたいする人殺し戦争を支持するよう強要しても、それだけは決してできないだろう」。

かれはアメリカ大統領、長官たち、顧問たち、補佐官、軍人たち一人ひとりにたいし、その行動がアドルフ・アイヒマンと同じであることについて釈明するよう要求している。

M・S・アーノニー氏は「われわれアメリカ人は、ベトナム人民とアメリカ人民にたいして犯したL・B・ジョンソンの重大な犯罪を処罰するよう要求しようではないか」とのべている。

アメリカ帝国主義者と南ベトナムのかいらいたちの気違いじみた戦争犯罪は、南ベトナム人民によって出口のないトンネルに追いこまれた敗北しつつある侵略者の最後の蛮行であり、断末魔の手負いのけだものの最後のあがきである。

これらの野蛮な行為によっても、アメリカ帝国主義者は南ベトナム人民をおどすこともできなかったばかりか、完全な失敗におちいることを避けることもできなかった。その行為によって、かれらが独立、平和、人権、正義、科学ならびに全世界の人民にたいするもつとも嫌悪すべき敵であることを暴露しただけである。またタネはからなくてはならない。過去のヒトラー・ファシストと同様に、戦争犯罪について、歴史と人類によって決定づけられた運命からのがれることはできない。

歴史と人類はだんじてアメリカ帝国主義を許さない

南ベトナム人民にとって、唯一の真の代表者である南ベトナム解放民族戦線は、自由、独立、平和のためにいかなる犠牲をも恐れない決意をもった人間にたいしては、武器や残酷な戦争手段でも脅迫す

ることはできないことを、多くの事例をあげて指摘している。アメリカ帝国主義者の逆上した行為は、南ベトナムにおけるこれらの失敗をつぐなうことができないばかりか、南ベトナム人民の心のなかに日ましに燃えあがる侵略者への憎しみのほのおに、さらに多くの油をそそぐだけである。南ベトナム解放民族戦線は緊急に、各国政府、大衆組織、科学者、法律家、宗教者、著名人、知識人、世界のすべての自由と正義を愛する人びと、とくにアメリカ人民にたいし、アメリカ帝国主義に反対する世界的な統一戦線によって南ベトナム人民の側に立つようよびかけている。そしてジョンソン、ディーン・ラスク、マクナマラその他の戦争犯罪者の殺人をやめさせるため断乎とした行動を展開し、かれらにその犯罪のつぐないをさせ、人類の尊厳と正義と自由をまもり、すべての人民の独立と民族自決の権利をまもり、インドシナ、東南アジアおよび、世界の平和をまもる行動にたつようよびかけている。われわれは、アメリカの戦争犯罪者にその罪のつぐないをさせることを決意している！

アメリカ帝国主義者は、南ベトナムでの侵略戦争を終わらせ、アメリカとその衛星国の軍隊と武器を南ベトナムから引揚げさせ、南ベトナムのすべての米軍基地を取り除かなくてはならない！

南ベトナムの国内問題は南ベトナム人民自身の手で解決されねばならない！

南ベトナム解放民族戦線は唯一の真の、南ベトナム人民の代表である！

〔訳者付記〕

黒書の翻訳については「赤旗」（一九六六年八月二二日～二〇日）訣載の記事を参照しながら、英文テキストをもとに、さらに仏文テキストを参考にしたことを付記しておく。

北ベトナムにおけるアメリカの戦争犯罪

ベトナム民主共和国外務省

みずから全世界に暴露した侵略者の姿

一九六四年に、南ベトナムにおけるアメリカ侵略者とその手先きどもの立場は、危機をはらむに至った。「特殊戦争」での敗北をまぬがれようとして、アメリカ帝国主義者は、空襲という形で、「戦争を北へ拡大する」ことを決定したのである。

一九六四年八月五日、アメリカ空軍はベトナム民主共和国の海岸沿いの一連の箇所以最所の攻撃を加え、こうしてベトナムにおけるアメリカの侵略戦争に新しい局面を開いたのである。

一九六五年二月から、アメリカ帝国主義者は、恥知らずにもベトナム民主共和国に対する破壊のための空襲を行なうに至った。

一九六五年二月七日、八日及び一日、アメリカとその手先きの数百の飛行機は、ベトナム民主共和国領土の一七度線に近いいくたの箇所、特にドン・ホイ(クワン・ビン省の省都)及びホ・サ(ヴィ

ンリン地域の町)を攻撃した。

このとき以来今日まで丸一年間、北ベトナムに対するアメリカの海賊的攻撃は、激しく、かつますます大規模に行なわれてきた。

一七度線に隣接した地域や海岸沿いの地域を爆撃したのち、アメリカとその手先きの飛行機は、第七艦隊や南ベトナム及びタイにある基地から進発して、ベトナム民主共和国の領土内にますます深く攻撃を加え、北へ北へと「エスカレート」してついにベトナム・中国の国境にまで至った。はじめは数日間の間隔をおいて行なわれた空襲は、ついで毎日、さらに毎時間行なわれるようになった。アメリカとカイルイの空軍は、いくたの人口稠密地域を攻撃し、ベトナム民主共和国の数多くの経済的・文化的・社会的施設を破壊した。

サイゴンで公表された数字によれば、一九六五年二月七日から一月一八日までに、アメリカとカイルイの空軍は北ベトナムに対して三、〇〇〇回以上の攻撃を加えた。そして一九六五年二月七日から一月二二日に至る間に、アメリカとカイルイの飛行機はのべ一八、〇〇〇回以上の出撃を行ない、ベトナム民主共和国の領土に数万トンの爆弾を投下した。

ベトナム民主共和国は独立し主権を有する国であり、社会主義陣営の一員である。ベトナム民主共和国の領土に恥知らずの空襲を加えることによって、ジョンソン政府は世界世論の眼前に自ら侵略者、戦争挑発者としての正体を暴露した。アメリカ政府は——自ら尊重すると誓った——ベトナムに関する一九五四年のジュネーブ協定及び国際関係を律する最も基本的な諸原則を踏みじった。数千

に及ぶ諸事実を措くとしても、以下にのべる諸事実こそは、ベトナムにおけるアメリカの野蛮な戦争犯罪の否定し難い証拠であり、この犯罪は、進歩的人類の到底許すことのできないものである。

恥知らずな海賊的空襲の事実

人口稠密非武装地帯市民への攻撃

アメリカとカイライの空軍は、村落や県、省の諸都市、さらにはヴィンヤナム・デインのようなベトナム民主共和国の一連の主要都市など、多くの人口稠密地域を攻撃した。多数の経済的・文化的・社会的施設並びに住宅区域が荒廃に帰した。重要工業都市であるヴィンは、六三回以上も海賊的空襲をうけ、約一、〇〇〇トンの爆弾を投下された。西北自治区の区庁所在地ソン・ラは二〇回の爆撃をうけた。ベトナム民主共和国の綜合織物工業のあるナム・ディン市は一〇回攻撃された。これらの空襲は老人、婦人、子どもを含む一般市民の多数の死傷者を生み出したのである。悲惨にも家族の大半を失ったという例が多数ある。例えば、ドン・ホイのトー氏は、一九六五年四月四日のアメリカ軍の空襲で、その母、妻、子ども及び妊娠中の妹を一挙に失い、クイン・ルー(ゲー・アン省)のカソリック教徒グエン・ルオン氏は、一九六五年三月一五日の空襲で自らは重傷を負いその妻及び一才と三才の二人の娘を殺され、ナム・デイン市のシン夫人の家族は、彼女自身と三才、七才、十才の子ども全部が同市に対する米軍の空襲によって殺された。

アメリカとカイライの空軍はまた、一七度線に沿った非武装地帯の一般市民をも攻撃したが、この

非武装地帯では、ベトナムに関する一九五四年のジュネーブ協定及び双方によって協定をみた非武装地帯に関する規則によって、あらゆる軍事活動は嚴重に禁止されているのである。彼らはタ・ルア、ク・バイ、タ・パン、タ・ポイ、サ・リアなど非武装地帯の多数の箇所、及び南北ベトナムの臨時境界線となつているベン・ハイ河のヒエン・ルオン橋の北端隣接地域を爆撃した。非武装地帯の北側に位し、一七度線に近く、海岸から二〇キロ離れ、面積四平方キロに及ばない小島コン・コ島は、約一五〇回の攻撃をうけた。

共和国医療諸施設への攻撃

アメリカとカイライの空軍は、ベトナム民主共和国の医療施設に対し組織的な攻撃を加えた。結核や癩病の治療を専門とする病院、州立の病院、地区の診療所、公共保健所、産院さらにはタン・ホア省の老人ホームなどを含む三〇箇所以上の医療施設がくり返し爆撃、掃射をうけ、あるところでは一〇回にも及んだ。攻撃されたすべての施設は、遠方からもはつきりと識別できるように赤十字の印をつけていたこと、またこれらの施設は、普通軍事地帯からは遙かに離れ、例えばゲー・アン省のクイン・ラブ癩病研究・治療センターなどは主要公路から九ないし十キロも離れている、ということを指摘しなければならない。アメリカ帝国主義者は、このセンターに対して一九六五年六月一二日から二二日まで一〇日間連続して攻撃を加え、すべての科学的研究施設と二、六〇〇人の患者用治療設備を含む一六〇の建物を破壊し、一三九人の患者と医師を殺し、その他八〇人の人びとを傷つけた。一九六五年八月七日タン・ホア省の結核病院K71に対する爆撃では、約五〇の建物を破壊し、五人の医師を含む三〇人を殺し、その他多くの人びとを傷つけた。一九六五年

七月九日、一〇日、一一日イエン・バイ省イエン・バイの保健所、病院、衛生管理所、流行病管理所、結核サナトリウム及び母子保護施設に加えられた空襲の結果は以下の通りであった。家屋破壊三〇軒、主として医師、医療勤務員、妊婦、子どもなど殺されたもの四七人、その他多数の負傷者。

共和国教育諸施設への攻撃

アメリカとカイライの空軍は、ベトナム民主共和国の教育施設を爆撃掃射した。今日までに一二〇以上の学校が破壊された。すなわち大学一、師範学校及び中級専門学校一三、小・中学校九〇及び幼稚園二〇。十才以下の多数の子どもを含む数百人の教師と生徒が悲惨にも殺されあるいは傷つけられた。多くの学校が猛烈な攻撃をうけたが、あるものは数回にわたって攻撃された。例えば非武装地帯にあるフォン・ラプの小学校は八回の攻撃をうけた。ヴィンの師範大学は数トンの爆弾をうけて完全に破壊されてしまった。

最近アメリカのいわゆる「平和の探求」が失敗に終わってのち、アメリカの飛行機は、ベトナム民主共和国領土に対するその無差別爆撃を昼夜にわたって再開し、新しい犯罪を犯すに至った。一九六六年一月三十一日アメリカの飛行士は、タイン・ホア省ティン・ジア県ハイ・ホア郡の小学校を攻撃し、二四人の生徒を死傷させた。一九六六年二月九日アメリカの飛行機一二機はハ・ティン省フォン・ケー県フォン・フック郡の下級高等学校を攻撃した。この結果一五才以下の生徒五七人が死傷した。このような学校に対するアメリカの狂気じみた攻撃は、アメリカ侵略者どもがやけになってどんな犯罪を犯すことすら躊躇せず、小さな子どもたちの頭上に爆弾の雨を降らすことすらあえてする、ということを示している。

水利施設・氣象台
教会・寺院の攻撃

洪水や旱バツ、死や飢饉といった災害をひきおこし、こうしてベトナム人民を脅かす目的で、アメリカとカイライの空軍は、タイン・ホア、ゲー・アン、ハ・ティン、クワン・ビン、ニン・ビン、ナム・ハ及びハ・タイの諸省で水利管理施設に対する計画的攻撃を開始した。チュウ河の灌漑網（タイン・ホア省）だけで一九六五年四月四日から八月二六日にかけて二九回の空襲をうけた。この灌漑網の中心の一つであるバイ・ツオン・ダムは七回、バン・タク・ダムは一回、フォン・ラク・ダムは三回攻撃をうけた。一九六五年九月九日、一〇日、一一日、一二日、一四日及び一五日にアメリカの飛行機はくり返しハ・タイ省のスオイ・ハイ・ダムを爆撃した。進歩的人類が許すことのできないアメリカ侵略者のこうした憎むべき犯罪は、世界幾百万の正直な人びとを憤激させた。東からも西からも、世界の世論はたえまなく、このような極悪・非道の奸策・行爲を暴露してきた。一九六五年八月二三日に発表された声明の中で、イギリスの著名な哲学者バートランド・ラッセル卿は、アメリカ帝国主義者の犯罪を強く非難攻撃し、彼らがこのような非人道的奸策・行爲を直ちにやめるよう要求した。

アメリカとカイライの空軍は、また、ベトナム民主共和国の氣象台、氣象觀測所を攻撃したが、これら施設の任務たるや氣象の觀測、測定を行なつて天気予報の活動を助け、また国民經濟の様々な分野に役立つ氣候学的調査に貢献することである。今日までのところ爆撃はクワン・ビン、ハ・ティン、ゲー・アン、タン・ホア、ソン・ラ、ライ・チャウ、ジア・ロ、イエン・バイ及びハイ・フォンにある三〇以上の氣象台、氣象觀測所に対して加えられた。これらのうちツアン・ジアオ、ホン・グ

ーなどのような若干の箇所は数十回の攻撃をうけ、またソン・ラやフリーエンのようなどころは数トンの爆弾をあげせられた。これらの気象施設は、普通他の国々でもみられるように、緑の芝生、垣根、観測設備を保護する白亜の掩護物、一〇ないし一二メートルの風見といった型通りに作られているから、どんなことがあっても軍事目標と見誤られることはない。こうした明瞭な特徴はアメリカのパイロットには周知のことであって、彼らは上空からはっきりとこれらの施設を識別できるのである。

アメリカとカイライの空軍は、多くの教会と仏教寺院を爆撃し、多数のカソリックの牧師、仏教の僧徒、例えばチオン・ヴァン・ロック神父（ハ・ティン省キー・アン県クイ・ホア教区）ドン・ゴク・ウアン師とグエンダン師（クアン・ピン省クアン・チャク県フック・チャク村）などを殺し、またカソリックと仏教の信者の間に多数の死傷者を生ぜしめた。アメリカの飛行機によつて破壊あるいは損傷させられた教会と仏教寺院には特に次のようなものがある。トウイ・コ（ニン・ピン省）、タン・ヴィン（タン・ホア省）フ・ファンとヴィン・レ（ゲー・アン省）クイ・ホア（ハティン省）タム・トア（クアン・ピン省）などの教会、ヴォン・クン、ナム・アン（ナム・ハ省）ノン・ヌオク（ニン・ピン省）ジァブ・ホアとドン・タク（タン・ホア省）ファ・クアンとフック・チャク（クアン・ピン省）などの仏教寺院。

アメリカとカイライの空軍は、ホ・サ（ヴィン・リン地区）ヴォイ（ハ・ティン）ドゥングとソイ（ゲー・アン）ツ・チュ（タン・ホア）ヴァン・ディン（ハ・タイ）などの市場や、一連のバスや鉄道の停

車場など市場や、他の公共の場所……また国営農場や建設現場、工場、橋梁、道路のような多くの経済的施設を破壊したが、この結果市民の中に多数の死傷者を生じた。

最新・最大の
破壊力の動員

要するにアメリカの飛行機はベトナム民主共和国の領土を無差別に爆撃・掃射し、子ども、婦人、老人、教師、牧師、患者、医師などを含む多数の市民を殺してきた

のである。……アメリカのジョンソン大統領が「軍事目標」とか「コンクリートと鉄」とよぶところのものは、実際は人口稠密地帯、病院、学校、市場、教会、仏教寺院などのことなのである。

アメリカ侵略者は、ベトナム民主共和国に対する犯罪的な破壊戦争を遂行する上で、例えば掃射・爆撃のためにアメリカ空軍のF 100、F 101、F 102、F 104、F 105、B 57爆撃機、アメリカ海軍のA 3、A 4、A 6、F 8u、F 4など、また北ベトナムに対するスパイ活動のためにR F 101、R B 57、U 2及び無人飛行機といった最も最新式の超音速ジェット機を使用した。彼らは各種の型のロケットや高性能三、〇〇〇ポンド砲、ブルアップ・ミサイルなどのような高度の破壊力をもつ兵器を使用した。彼らはナパーム弾や白燐弾、レージィ・ドッグ破片弾という(重さ八〇〇グラムの一種の手榴弾で、六つの真鍮の腕をもち、破裂するとあらゆる方向に約二五〇の小さな鉄の弾丸をうちだす)、また明らかに多数の一般市民の殺傷だけを目的とする有毒化学薬品などさえも使用してきた。各種の型の兵器や戦闘方法が初めて試験的に使われたが、特にその中には空対地誘導ミサイル・ブルアップやF 4、F 105のような超音速ジェット機などがある。

ベトナム民主共和国を乱暴に爆撃し、人口の稠密した町や村、病院、学校、ダム、気象設備、市

場、仏教寺院、教会などを攻撃することによって、ジョンソン政府は人間倫理の規範と良心を乱暴に侵害し、人類の最も基本的な諸原則を侮辱し、ベトナムに関する一九五四年のジュネーブ協定及び国際法の最も重大な違反を故意に犯したのである。

破産したペテン論と崩れ去ったジョンソンの幻想

恥知らずの侵略行為と北ベトナムにおける憎むべき犯罪を正当化するために、アメリカの支配層はベトナム民主共和国を中傷しバカ気た議論を行なっている。

彼らは一九六四年八月四日の夜いわゆる「トンキン湾事件」なるものを作り出し、これを一九六四年八月五日のベトナム民主共和国に対する「報復」の口実とした。しかしこの茶番狂言はあまりに下手くそであったため、世界世論の前にアメリカの侵略的特色をかくすことができなかった。

一九六五年二月の始め、ジョンソン大統領はアメリカのベトナム民主共和国に対する二月七日、八日、一日の新たな戦争行為を正当化して、これらはブレイクとクイ・ニヨンにあるアメリカの基地に加えられた南ベトナム解放軍の攻撃に対するアメリカの「報復」であるとのべた。このアメリカの主張は世界世論の前に破産してしまった。ジョンソン政府は次いで、一九六五年三月以来拡大の一途をたどった北ベトナムに対する継続的空襲の口実として、北からの「侵略を制止すること」が必要だと称した。しかしこのアメリカの新しい主張も、ベトナムにおける事態の発展によって完全に打ち砕

かれた。

ベトナムはアメリカから約一万マイルも離れている。ベトナム人民はいままで一度もアメリカに危害を加えたことがない。フランス植民地主義者の侵略戦争遂行を助けることによって、ベトナムに干渉したのはアメリカ帝国主義者である。ベトナム人民が第一次抵抗戦争を勝利によって飾ったことによつて、一九五四年のジュネーブ協定はベトナムの国家的な諸権利、すなわち独立、主権、統一、領土保全を認めたのであつた。しかしアメリカ帝国主義者はひきつづきベトナム人民の内政に乱暴に干渉しつづけた。すなわち彼らはサイゴンにファッショ的独裁カイライ政権をデッチあげ、南ベトナム人民の愛国運動に対して「特殊戦争」をしかけた。最近彼らは南ベトナムを直接侵略するために二〇万のアメリカ軍を送りこんだ。彼らは「清掃」作戦を強化し、殺しつくし、焼きつくし、破壊しつくす「焦土」作戦を実行し、一般市民を虐殺し村落を灰塵に帰すために南ベトナムで公然と大規模に毒ガス、有毒化学薬品を使用し、こうして極悪の犯罪を犯している。正当な自衛の権利を行使し反撃を加えることは、アメリカの侵略の犠牲者である南ベトナム人民の当然行なうべきことであり、彼らにだけその権利がある。アメリカ帝国主義者は南ベトナム人民の激しい反撃にあつて手の下しよがなくなり、彼らの敗北を「報復」し南ベトナムへの「侵略を制止する」という口実の下に北へ戦争を拡大するに至つた。形勢が悪くなり論拠を失つた悪党の奇妙な論理ではないか！

ジョンソン政府は、力によつてベトナム人民を屈服させ、アメリカの傲慢な条件の下でベトナム人民に交渉をおしつけようと期待したので。何という幻想であらう！ 北ベトナムにおけるアメリカの

「エスカレーション」は南北ベトナム人民の士気を沮喪させることはできず、反対にそれはアメリカ侵略者に対する憎しみを一層深めさせ、南北ベトナム人民はますますしつかりと団結し、祖国の独立と自由のために最後まで闘いぬく断乎たる決意を固めているのである。

北ベトナムの軍民はアメリカの空襲に断乎たる反撃を加えてきた。ベトナム民主共和国に対するアメリカのエスカレーションが始まってから一年たった一九六六年二月七日までに、アメリカの空海軍の最も最新式の飛行機八、七、四機が北ベトナム上空で撃墜された。大編隊による大規模な攻撃やあるいは小編隊で様々な高度をとるコソドロ的攻撃や、昼間攻撃や夜間攻撃などいろいろな戦術をとっているにもかかわらず、この空の海賊どもにとっては、北ベトナム軍民の対空砲火を逃れることはできない。

北ベトナムの軍民はその輝かしい偉業によって、「米空軍の威信」をひきづりおろし、もしも戦士が極めて勇敢であるならば歩兵の武器や通常の対空砲によつて最も最新式の超音速ジェット機を撃墜しうることを証明したが、これはアメリカ侵略者の予想をくつがえすものである。この敗北は、ペンタゴンと緊密な接触をもつ評論家ジョセフ・オルソップの認めたところであつて、彼はニューヨーク・ハラルド・トリビューン紙にこう書いた。「大統領の戦略はすでに失敗している。なぜなら北ベトナムの共産主義者たちは、その領土に最初の爆弾が落されたときから、決して掩護物に逃込もうとしなからだ。」

一方、南ベトナムの人民と武装勢力は、勇気を倍加し、ほとんどあらゆる戦場でくり返し敵を攻撃

した。南ベトナムの解放軍とゲリラ隊はヴァン・ツオン、バウ・バン、プレイメ、ダウ・チェンなどで輝かしい勝利をおさめ、またサイゴン、ビエン・ホア、ダ・ナン、チュ・ライなど敵の真只中でアメリカ侵略者とその手先きに手痛い打撃を与えた。このことは、北ベトナムに対するアメリカ帝国主義者の破壊戦争は、南ベトナム軍民のアメリカ侵略者とその手先きに対する熾烈な反撃力を増大させてこそすれ減少させなかった、ということを証明している。

国内外の政治的敗北——全世界人民からの孤立

北ベトナムに対する破壊的空襲を行なうことにおいて、アメリカの支配層は予期した結果を達成するのに失敗したばかりでなく、国内及び国外で重大な政治的敗北を蒙った。ジョンソン政府が北ベトナムに対する「エスカレーション」を進めれば進めるほど、憎むべき侵略者、戦争挑発者としての正体がますます暴露され、進歩的全人類の強い抗議と激しい非難をひきおこす。社会主義諸国の指導者と政府、アジア、アフリカ、ラテンアメリカの多くの独立国の指導者と政府、知識人、僧侶、世界的な著名士、多くの国際組織と各国の組織^(註)、要するに五大陸のすべての世論が抗議の叫び声をあげ、アメリカ政府がベトナム民主共和国の爆撃をやめ、アメリカの全軍隊を南ベトナムから引上げ、ベトナムに関する一九五四年のジュネーブ協定を尊重して正しくこれを実行するよう要求したのである。一連の西欧諸国の指導者と政府もまたベトナム民主共和国に対する爆撃を承認できない旨を表明し、ア

メリカがこのような恥知らずの攻撃をやめるよう主張した。世界のあらゆる大都市で幾億という人民が「北ベトナムの爆撃をやめよ」、「南ベトナムへの侵略戦争を中止せよ」、「米軍は南ベトナムから撤退せよ」などのスローガンのもとに大衆的デモを行なった。ほかならぬアメリカの中で、ジョンソン政府のベトナムに対する侵略政策に反対する強力な抗議運動が、いろいろな形をとってわき上った。すなわち集会、デモ、ティーチ・イン、ベトナム向け武器輸送列車の運転阻止、選抜徴兵カードの破棄、ハンガー・スト、南ベトナムにゆき南ベトナム人民を殺すことの拒否、自殺等々。

(注) 現在までのところ約四〇〇の国際組織と約一〇〇カ国の三五〇をこえる国内組織がある。

一言でいえば、アメリカはその歴史上これほどひどい孤立と世界人民の激しい抗議に直面したことはかつてなく、アメリカのいかなる大統領もジョンソンほど「こっぴどく批判され」たものはないのである。

いわゆるアメリカの「エスカレーション」の十カ月を回顧しながら、一九六五年二月四日ニューヨーク・タイムス紙は苦々しくも次のことを認めざるをえなかった。「いままでのエスカレーションは失敗であった。もっとエスカレーションを進めるならばきつと失敗するにちがいないし、それにともなつて深刻かつ広汎な危険をもたらすにちがいない」。一九六五年二月一三日クリスチャン・サイエンス・モニター紙は次のような批評を書いた。「(ベトナムにおけるアメリカのエスカレーションの)第一局面は、あらゆる点から不成功と見做さねばならない。」

実施後一年たった今日明らかなことは、アメリカの北ベトナムに対する「エスカレーション」戦略

なるものは、ジョンソンが夢想したような魔法の杖ではなくて、アメリカの南ベトナムにおける危機的情勢を挽回することはできない、ということである。反対に、彼らが戦争を「エスカレート」すればするほど、アメリカ侵略者はますます敗北を蒙り、どうにもならない受身の立場に追いこまれるだけである。

アメリカの北ベトナム爆撃を中止せよ、という世界世論のますます高まる圧力のもとに、アメリカ政府は一九六五年五月中旬「爆撃の一時停止」というトリックに訴えた。

さらに最近アメリカ政府は、そのいわゆる「平和の探求」の一部分として、このトリックを再びもちだし、彼らのいわゆる「善意」を示そうと試みた。

しかし広汎な世界の世論が指摘したように、アメリカの——「爆撃の一時中止」と「十四項目の提案」からなる——「平和の探求」なるものは、本質上ベトナムにすぎないのであって、それはアメリカのいわゆる「無条件交渉」の中に含まれている条件をベトナム人民に押しつけ、ベトナム侵略戦争を強化しようとするアメリカの意図を蔽い隠すためのものである。ひきつづく軍事的・政治的敗北にもかかわらず、アメリカ帝国主義者の侵略政策は変っていない。

アメリカ政府が、独立し主権をもつ国であり、かつ社会主義陣営の一員であるベトナム民主共和国を恥知らずにも爆撃したことは、明らかに鉄面皮な侵略であり、また極めて乱暴・野蛮なギャングのような行為である。アメリカ政府がきつぱりと無条件に空襲をやめねばならず、またベトナム民主共

和国に対するその他いっさいの戦争行為をきっぱりと無条件にやめねばならないことは、いうまでもない。アメリカ政府は、南ベトナムに対する侵略戦争を直ちにやめ、アメリカ及びその衛星国のすべての軍隊と武器を南ベトナムから撤退し、南ベトナム人民自身をして自らの事項を解決させねばならない。これこそがひとりベトナム人民だけでなく全世界の進歩的世論が緊急に要求しているところである。

完全な勝利の日まで

ベトナム人民とベトナム民主共和国政府は、社会主義諸国の政府と人民に対し、またアジア、アフリカ、ラテンアメリカの独立諸国、世界のすべての平和と正義を愛する国々の政府と人民及びアメリカ人民に対し、アメリカ侵略者の血まみれの手を抑止するために積極的かつ時宜をえた行動をとり、アメリカ帝国主義侵略者に反対するベトナム人民の正義の闘争に対して力強い支持の手をさしのべるよう熱烈によびかける。

ベトナム人民は、その祖国の最高の利益、すなわち独立と自由のために、また平和、民族独立運動、民主主義と世界の社会的進歩のために、一九六五年七月二〇日その指導者ホ・チ・ミン大統領が行なった次の断乎たる声明をつらぬきとおす決意を固めている。「たとえわれわれが五年、一〇年、二〇年あるいはそれ以上闘わねばならないとしても、われわれは完全な勝利をおさめるまで断乎とし

てたかうであらう。」

ベトナム人民は自分たちの決意と絶えざる努力により、また全世界人民の同情と支持により、自分たちの正義の愛国闘争は輝かしい勝利をおさめることを、固く信じている。

ハノイ、一九六六年二月

ベトナム戦争と解放の思想



一と口にベトナム戦争とよばれているが、いまベトナムで行なわれているのは、アメリカ帝国主義とそのかいらい、および衛星諸国による侵略戦争であり、ベトナム人民側からいえば、それに抵抗・反撃する人民戦争である。このことは南・北ベトナムについて共通にいえることであるが、さらに詳しくいえば、南ベトナムにおいては、それはアメリカ帝国主義者の侵略から自らを解放するたたかいであり、南ベトナム人民は政党・宗派・各大衆団体から成る広汎な民族・民主統一戦線としての南ベトナム解放民族戦線の指導のもとに解放軍の戦闘、解放区の建設という二つの面でたたかいをすすめている。

北ベトナムでは、アメリカ帝国主義者の空からの侵略にたいして、独立と社会主義を守り、そのことを通じて南ベトナム人民と一体となって、共通の敵アメリカ帝国主義およびその手先きにたいして、たたかいをつづけている。そのため、北ベトナムでは、労働党とホー・チミン主席の指導のもとに、「戦闘しながら生産する」体制が固められている。しかも、これらベトナム南北両地域の戦争を通じて、アメリカはついに戦争の主導権がにぎれず、地域的にも、量的にも侵略戦争を拡大しているのであるが、ベトナム人民の英雄的なたたかいと、これを支援し、連帯する世界の進歩勢力の前に、かえってアメリカの侵略戦争そのものの矛盾が日まじに拡大されつつある、というのがベトナム戦争の現段階である。

以下、この現段階にいたるまでの経過のなかから、いわゆるベトナム戦争の性格をつかみ、その本質をつきとめたいと思う。さいきんベトナム労働党第一書記・ジュアン氏が、ベトナム人民軍の青年会議でのべた講演の内容が、この主題と関連深いように思われるのでそれを紹介しながら、ベトナム人民あるいは指導者が、ベトナム戦争の性格と本質をいかに把握しているか、それをわたしたち自分の問題としてどう考えるべきかにふれたいと思う。

一つの独立国として誕生したベトナム民主共和国にたいして、フランス植民地主義者たちは、独立の年（一九四五年）から再侵略をつづけたが、翌一九四六年一二月、ついにフランスとベトナムの間に全面的な戦争が開始された。アメリカはアジア極東に社会主義国あるいは民族解放勢力が成長することを恐れ、社会主義中国への「封じこめ」という戦略的立場からフランスの再侵略を援助し、とくに朝鮮戦争が休戦になった一九五三年からは、全面的にフランスにたいして武器・弾薬・戦争資金の援助を強めた。フランスの侵略にたいするベトナム人民のたたいは、「抵抗戦争」とよばれているが、その抵抗は、実際にはフランス植民地主義とアメリカ帝国主義の連合勢力に



歴史的過程にあらわれた ベトナム戦争の性格

レ・ジュアン氏は、ベトナム人民が、これまでに五度びアメリカを打ち負かしたとして、それを次の五段階にわけている。

デイエンビエンフーの勝利——1954・5

向けられたものであった。

八年余にわたる戦争の過程でベトナムは一九五三年頃から、土地改革を行ない、「働く農民に土地を！」の政策を実施し、そのことが仏・米にたいする抵抗戦争に大きなエネルギーをもたらすものであることを知った（この経験が一九六〇年末以来、南ベトナム解放区で再現されている）。

こうして、デイエンビエンフーの勝利は、フランス植民地主義とアメリカ帝国主義の両者にたいするベトナム人民の軍事的・政治的・経済的・思想的な勝利だったのである。

ゴ・ディンジエム独裁政権打倒の勝利——1953・11

デイエンビエンフーの勝利の実績のうえに立って、ジュネーブ協定が成立した。しかし、会議に参加したアメリカは、協定の条項を尊重するような声明をだしながら、実際にはフランスにかわってベトナムへの侵略を露骨に開始した。その第一着手は、一九五六年十月、従来の親仏的な旧アンナン帝バオダイ（保大）にかえて、親米的な反共カトリック教徒のゴ・ディンジエムをベトナム共和国大統領におし立てたことであり、その第二着手は、このジエム大統領を使って、一九五六年七月に予定されていた南北ベトナム統一の総選挙をボイコットしたことであった。これによって、アメリカは自ら尊重すると言明していたジュネーブ協定の諸条項を踏みにじり、南ベトナムをアメリカの軍事基地化するという、新植民地主義政策を強行しはじめた。そのときからジエムの独裁とアメリカの

侵略にたいする南ベトナム人民の強い反対が政治闘争、あるいは自衛のための武装闘争となって発展しつつあった。

一方、北ベトナムでは、一九五八―六〇年の「経済改造ならびに発展、文化の発展三カ年計画」を遂行し、憲法の大改正をやり（一九六〇年）、一九六一―六五年の社会主義五カ年計画をすすめ、北の社会主義を固め、これをテコにして南北ベトナムの平和的統一を促進する方針を着実に実施していった。この間に、一九六三年一月、クーデターによってゴ・ディンジエム独裁政権が倒されたことは、これをかいらいとしてあやつっていたアメリカ帝国主義の侵略政策の破綻を示すものであり、アメリカ帝国主義にたいするベトナム人民の第二の勝利であった。

アメリカの「特殊戦争」にたいするベトナム人民の勝利

— 1964—65

南ベトナム人民の反米・反独裁のたたかいは、次第に強化され、一九六〇年一月二〇日、南ベトナム解放民族戦線の結成は、民族・民主的な基礎のうえに立つ広汎な統一戦線の成立と、同時に南ベトナム人民の政治闘争の結合をもたらした。こうして、南ベトナム解放民族戦線の軍・民の力はいちだんと強化され、解放区の建設がすすむとともに、アメリカのかいらい政権の間には、不安・動揺がつづき、クーデターが相次いだ。

このような南ベトナムの政情の安定と、解放勢力の徹底的な抑圧をめざして、一九六四年七月に、アメリカはマックスウェル・テラー元統合参謀本部議長を南ベトナム大使に任命して、テラーの持論である「特殊戦争」を

現地で指導させた。しかし、南ベトナム軍を表面にたてながら、アメリカはその後にあって実質的にこれを指導し、二〇ヵ月内に南ベトナムを「平定する」という「特殊戦争」の戦略・戦術は完全に破綻し、解放戦線は南ベトナム全土の五分の四、人口の七分の五（一千四百万人中の一千万人）を支配するにいたった。その頃アメリカは北ベトナムへの挑発をはじめたが、「特殊戦争」政策の破綻をつぐなうことはできなかった。アメリカ第三の敗北である。

乾季大作戦の敗北——1965〜66

これまでアメリカ軍は、いわゆる軍事顧問団という名で、南ベトナム政府のかいらい軍を指導し、これといっしょにたたかってきたのであるが、もはやアメリカ自身が表面に出て、増強した兵力で直接先頭に立ってたたかう以外になくなった。一九六五年中にアメリカの兵力は、二万人から二五、六万人に増加された。とくに、一九六五年の乾季に、アメリカのいっさいの機動力を發動させ、陸・空・海三方面からの攻撃で戦局の指導権をにぎろうとした「乾季作戦」は、解放民族戦線の正規軍・地方軍・ゲリラ軍の三位一体化した人民戦争のまえに敗退し、この窮境を脱出するために、戦争を本格的に北ベトナムへ拡大（エスカレート）せざるをえなくなった。

「北爆」の失敗からさらに戦争の拡大へ——1966

こうして、一九六五年二月にはじめられた北ベトナム爆撃（北爆）は、日を追うて死に者狂いに強化され、一日に百何十波を数える攻撃が、南でも北でもくりひろげられている。

しかし、南ベトナムでのアメリカ機の撃墜総数四、三八〇機（一九六六年七月現在）、北ベトナムでも一、四〇〇機（一九六六年九月現在）という数字で示されるように、ベトナム人民は、どんな攻撃にもひるまず、南ベトナム解放民族戦線では、一九六五年三月二二日の声明、北ベトナムでは同じく四月十日の国会の決議に表明された通り、アメリカおよび衛星国軍とアメリカ軍事基地の撤退、撤去、北爆の即時無条件かつ永久的な停止、南ベトナム問題は解放戦線の計画にもとづいて解決し、南北ベトナムの統一はベトナム人民自身の手によって、外国の干渉なしに実現する、という基本方針を堅持して、「独立と自由」「独立と自由のもとでの平和」（ホー・チミン主席のスピール）のために、世界人民の支持のもとに、あくまでたたかひぬこうとしているのである。

しかも、アメリカは南では、いつさいの国際法や人道的な考慮をかなぐりすてて、戦争犯罪的な悪虐手段をとりつづけ（「黒書」参照）、一七度線の非武装地帯に兵を入れ、さらに一七度線より北へ兵力をおくりこむかもしれない、という危険な冒険の門口に立っている。

これらの歴史的経過が示す通り、アメリカは一つのベトナムを分断して、南ベトナムを、その軍事基地化するた

めに干渉と侵略をつづけ、それらの干渉と侵略がいずれも失敗を重ねるや、戦争を北ベトナムへ拡大して、あくまでベトナムにおける軍事的・政治的・経済的支配権を握ろうとしているのである。本来歴史的に一つであるベトナムを分断し、ジュネーブ協定による休戦実現のための一時的な軍事境界線にすぎない北緯一七度線をいわば国境化して、「北ベトナムから南ベトナムへの侵略」を阻止するために兵力を送っているという、アメリカの口実がまったくアメリカ自身の侵略をカムフラージュするためのものであることは明白である。ジュネーブ協定を完全に踏みにじって、第一ボタンをかけたアメリカが、どんなに口実をもうけ、いいがかりをつけ、また、「平和」交渉を口にしても、第二、第三のボタンはかけちがったままである。

第二次大戦後、中国をはじめ、アジア、極東、東南アジアおよびアジア、アフリカの各地におこった社会主義や民族解放勢力を阻止して、帝国主義、植民地主義者の権益と支配を保持し、拡大しようというのが、アメリカのベトナムへの干渉、軍事介入のねらいである。以上、二一年の経過はこのことを如実に示している。



帝国主義との対決に示されるベトナム戦争の本質

それでは、このような事実の経過と、ベトナム戦争の現実から、何を本質としてつかむべきであろうか。ベトナム戦争は、本質的には帝国主義、新旧植民地主義にたいする人民戦争である。

人民戦争勝利のカギ——民族的・民主的・人民的要素

人民戦争は、帝国主義・新旧植民地主義者の侵略に反対し、全人民が打って一丸となつてたたかう民族的戦争である（民族主義的）。

人民戦争は、帝国主義・新旧植民地主義者とむすびついた封建的・反動的勢力を打破して、人民の諸権利を守り、高める民主的戦争である（民主主義的）。

人民戦争は、労働者・農民を主体とする人民自身が、人民自身の手で、世界の進歩的人民と連帯してたたかう、文字通り人民の戦争である（人民的）。

たたかう南北ベトナム人民の肉体と精神を支えているのは、この民族的・民主的・人民的な要素である。人民戦争の「軍事芸術」の特徴が、「精神面の強さで強力な物質力に勝ち、弱い者が強い者に勝ち、粗末な兵器で現代兵器に勝ち、人民の愛国精神と徹底した革命精神で侵略的帝国主義の近代的軍隊に勝つことにある」（ポー・グエンザップ）といわれる、その精神面、その革命精神の内容にふくまれるのは、ここにあげた民族的・民主的・人民的要素である。

しかも、これらの要素、これらの精神は、全ベトナム人民の英雄的行為や、困難なたたかひの勝利を内面的に支えているだけでなく、帝国主義的侵略者がその本質をバクロして、残虐きわまる、危険この上ない手段で、戦争を激化し、拡大してくればくるほど、これらの要素、これらの精神も激しい熱情とともに、高度の、微密な、そして弾力性にみちた政治意識として発展してきていることを重視しなければならない。戦争の外面的な経緯や、現象的な勝敗だけでなく、ほんとうに戦争を勝利へみちびいていく、これらの要素や精神を具体的につかむことによつて、ベトナム戦争の本質を知ることができるのではなからうか。そして、この本質を知ることによつて、われわれはベトナム戦争におけるベトナム人民のたたかひから何を学び、何をわれわれ自身のたたかひに適用できるかを身につけ、共通のたたかひの共通の勝利へむかつて、支援と連帯を強めていくことができるのではないだろうか。

ベトナム労働党の第一書記レ・ジュアン氏は、さきあげた五段階にわたるベトナム人民の勝利をのべたのち、これらの要素や精神がどのように結合され、どのように発展されてきたかを指摘している。これはきわめて重要な問題である。レ・ジュアン氏は、まずベトナム人民の光輝ある伝統としての愛国心をあげ、(1)愛国心と社会主義(2)民族主義とプロレタリアの階級意識の結合を強調し、いまアメリカ帝国主義とのたたかひをおしすすめているの

も、これらの精神の継承・発展であるといっている。

何よりも民族的独立をかちとり、保持しようとする決意が、一人ひとりのベトナム人の生存そのものを保障する手段であり、それが無限の力となってわいてくる、というのである。「祖国が征服されれば、人民はすべてをうしない、独立をうばわれれば、自由も民主主義もなく、ただ抑圧と搾取の重荷のもとに、生きる権利さえうばいとられてしまうだろう」。

また、ベトナム人民は、歴史的経験から、「祖国を救うことが、自分の家族を救い、自分自身を救うことである」ことを知っている。自分と家族と祖国、それが一体となつているところに、ベトナム人民の強い民族主義、愛国精神がある、というのである。しかし、かりに、個人や家族の契機をふくむとはいえ、これだけであれば、右も左もない、というよりは極端な国家主義、民族主義になりかねない。民族意識だけを考えて、階級的利益を無視すれば、強い革命精神は出てこない。したがって、「人間の闘志は、あらゆる日常の要求、生活の問題、つまり階級的意識と関連している」。不断の革命感情は、階級的な立場と切りはなしてはありえないのである。こうして、「革命的闘争は、(敵の)抑圧や(支配者の)不正からでてくる。抑圧や不正への怒りと憎しみが、とくべつの力をともなつて、たたかいへ駆りたてる」。ここに、アメリカ侵略者の兵力が増大され、手段が残虐になればなるほど、強い怒りと憎しみをもって、これとたたかい、勝利を占めつつあるベトナム人民の尽きないエネルギーの根源が見出されるのではないだろうか。

民族的利益と階級的利益の正しい結合

このレ・ジュアン氏の指摘は、青年にむかっつての講話で述べられているだけに、きわめて質朴であり、簡明であるようにみえる。しかし、その意味は、理論的にも、現実的にも、きわめて重要である。たとえば、レ・ジュアン氏は一九三〇年のベトナム国民党の指導による国民革命が失敗したのは、かれらが勤労人民の利益、農民にとつて死活を意味する土地問題が考慮されず、大衆が熱意をもつて支持せず、「運動がスタミナを欠いた」ためであつたといつている。三〇年の国民党革命に欠けていたスタミナを補い、これを革命的、大衆的なものに指導してきたのが、ベトナム労働党の立場であり、労働者および農民の民族的・階級的意識である。レ・ジュアン氏は、それをベトナム人民のプロレタリア的愛国主義とよび、つぎのように定式化している。

「これこそが、民族独立、民主主義、祖国の再統一、社会主義の正しい結合である」

このプロレタリア愛国主義は、何よりも第一に民族の独立を重要視している。これまで、あまり民族精神や民族的利益を強調すると、階級意識や階級的利益の軽視になる、という風に考える人たちがいた。しかし、それは民族的利益と階級的利益との間の正しい結合を理解しないものだ、というのである。このような意味での（プロレタリア）愛国主義なしに、同様にまた民族的解放なしに、階級的解放はありえない。「はじめに」のところで指摘したように、ベトナム人民のたたかいが、南においては解放のたたかいであり、北においては独立と社会主義を守るたた

かいであり、ともに南北統一を促進するたたかいであるといわれるのは、まさにこの意味においてである。

さらに、ベトナムでは「民族的独立への熱望は、民主的自由への要求とつねにむすびついていた」「土地を農民へ！」「人民に民主的自由を！」というのが、そのスローガンであったし、それはいま、南ベトナムでの解放区の建設や、北ベトナムでの社会主義建設で具体的に実行されているところである。ベトナムの労働者や農民を中核に、広汎な人民が前線で、あるいは後方でたたかっている反米・反独裁のたたかいの本質的な内容は、独立と民族再統一と人民・民主主義（南の解放区）と社会主義（北ベトナム）である、ということが出来る。

もちろん、これらは機械的に、人工的に結合されているのではなく、不断の情勢の変化と緊迫のなかで、敵にたいてたえず人民自身の力を増大させ、臨機応変にたたかいながら發揮される人民のエネルギーとして躍動している思想的・精神的要素である。そして、これが祖国の土に流され、祖国の土にしみこんでいくベトナム人民の血のなかに脈うっているものである。わたしたちは、この「運動のスタミナ」を身につけなければならない。



どう考えどう行動するか

以上のほかに、もう一つ忘れてならないことは、このようなベトナム人民にたいして、アジア・アフリカ、ラテンアメリカ諸国人民、世界の労働者、アメリカをふくむ世界の平和愛好者たちが、それを自分たち自身の問題として支援し、ベトナム人民との連帯を強めつつあることである。わたしたち日本人民が、ベトナム戦争をどううけとめ、どう行動するかも、この観点からにほかならない。

ベトナム人民のたたかいのなかに躍動しているものが、民族的、民主的、人民的なものであり、独立・民主・再統一・社会主義の正しい結合であるとすれば、ベトナム人民への支援、連帯の運動も、これと血の通うものでなければならぬ。

日本は完全に独立しているといえるだろうか。アメリカ軍の基地問題をふくめて安保体制打破の課題がわたしたちの前にある。

日本は民主的といえるだろうか。勤労階級、一般市民の権利諸闘争が、わたしたちの前にある。

祖国の再統一。南北に分断されたベトナムとはちがった意味、ちがった形においてではあるが、沖縄・小笠原返還のたたかいがわたしたちの前にある。ベトナム戦争の拡大とともにこの問題はますます重要性をもってきている。

社会主義の問題。日本の労働者の政治的自覚は、けつきよくこの課題にすまざるをえないし、また、理論的に組織的にその方向にすすみつつある。その間に、日本独自の諸条件によるひづみや迂余曲折はあるが、歴史の進歩の方向を生活の条件のなかで自覚していくところに、日本の労働者と人民の自覚もすすんでいるのである。

これらの諸課題をベトナムおよびベトナム人民のたたかいの現実に照らして、日本の労働者・農民・市民が、それぞれを生産点で考え、行動するということが、これがいまわたしたちに要請されている、いちばん重要な歴史的課題ではないであろうか。ベトナム戦争を、これまでよりも深い時点で、思想的、精神的要素にまで入って考えると同時に、何よりも生産点での行動をおこし、それを先頭に、それを中核にして、行動の輪を大きく広げていくこと、それがいまいちばん大事な課題となってきたのではなかろうか。そして、ベトナム戦争をわたしたち自身の問題として考え、行動することの意味も、まさにそこにある。

